関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

序文

その他のタイトル	Vorwort
著者	斎藤 清
雑誌名	独逸文学
巻	18
発行年	1973-03-25
URL	http://hdl.handle.net/10112/00017843

序

中村恒雄教授は昨年十二月古稀を迎えられ，本年三月をもって本学を定年退職なさいますので，本号をその記念号といたしました．

中村さんとは昭和初年，木村謹治先生の名講義「若きゲーテ研究」を震災後の本郷のバラック教室で机をならべて聴講した想い出も懐かしいのですが，たしか郁文堂前であったと思います，中村さんは「ウィルヘルム・マイスター」を卒業論文（そのころ卒論とは言いませんでした）に，などと立話して別れたことが妙に記憶によくのこっています．人は必死になって生きようとして，なおかつ死んでゆく，いわば生と死のはざまみたいなところに中村さんはゲーテを通じてご自身の体験的なものに何か意味を求め，形を与えようと努めてこられたように思うのです．そして生きることを考えよがあらゆるご研究の基調をなしているように思われます．古くは学生たちから恒さんと呼ばれ，愛し親しまれてきた円満な温いお人柄もそれとは無縁のものではないように思います．私自身中村さんとは学窓を出てからも奇しくも大高，阪大教養部，関大と長いあいだ職場を共にし，親炙する機会に恵まれましたのも何かの因縁と思うのです．こんど生れてきた順番に従ってお別れすることになりましたが，本学独文科創設以来非常勤講師として，はたまた専任教授として四半世紀にわたり独文科発展のためにご協力いただき，学生の教育，研究の指導にご尽力たまわりましたことに対し衷心より感謝の意を表します．ただ惜しむらくは，ご健康の方が近年少しく勝れぬかのようにおみうけしますのでくれぐれもご自愛くださいますよう祈念いたします．そして今後ともわれわれのために絶えざるご指導ご援助をたまわりますよう願ってやみません．

昭和四十八年二月

斎藤　清